薬品のお知らせと肺炎について

はじめに

皆さんこんにちは！だいぶ気温が上がってきましたが、気温差のせいか最近肺炎や子牛の下痢の診療が増えつつあります。

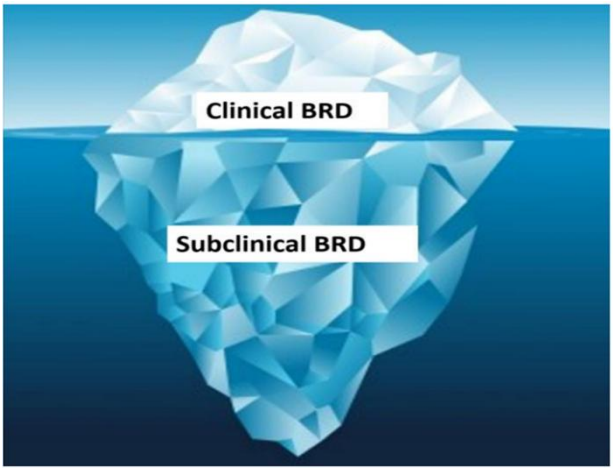
ということで今回は薬品のお知らせも兼ねて少しだけ肺炎のことを書こうかと思います。

肺炎≠咳　咳＝肺炎

以前からのＭ情報で津曲や僕が掲載していますが、アメリカでも日本でも肺炎は今や牛にとって最も厄介な病気と認識されています。

理由は生産性に時間差で悪影響を与え、なおかつ乳房炎や子牛の下痢と違って命に関わるケースはあまりないためだと僕は考えています。

そして何より、下痢と比べて目に見えないというのが最も厄介です



乳熱が周産期疾病の氷山の一角であるように、咳は肺炎のほんの上澄みにしかすぎません。

イラストのように、咳をしている牛の水面下で「肺炎ではあるが咳をまだしていない」牛がいることがとても多いです。

肺炎と生産性

　いくつかの研究で、具体的に肺炎が生産性に及ぼす影響について調べられています。

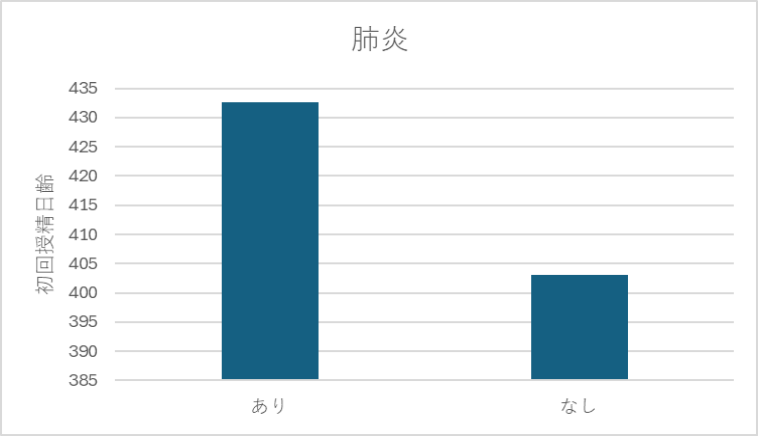
① 初産までの死亡率・淘汰率の上昇→2.8 倍

② 増体の低下→ADG　200g／日低下

③ 初産分娩月齢の遅延→15～30 日

などなどです。百聞は一見に如かずということで、今回の記事を書くにあたり僕も一つデータをまとめてみました。

テーマは「肺炎になると初回授精が遅れるのか？（増体が悪くなるのか？）」です。



これがそのグラフです。これはある大規模牧場の過去５年分のデータ（1200 頭分）をもとにしています。

５か月齢までに肺炎の治療（THMS が治療した）した牛と、その履歴がない牛の初回授精月齢の差は**約一か月**！診療データをもとにしているので、自家治療を含まず、かつ肺炎だけが理由で初回授精が遅れたかどうかは不明なため、あいまいなものではありますが、少なくとも肺炎の既往歴がある牛は初回授精が１か月遅れる＝分娩も１か月以上遅れる可能性が高いです。

乳価を 120 円／kg、乳量を 35 kgで計算すると、12 万６千円／頭の収入が減ることになります。もし月 10 頭の育成牛が分娩する農場であれば、**肺炎が多発した場合**、126000×10 頭×12 か月＝**約 1500 万円**の乳代収入が年間で減ることになります。

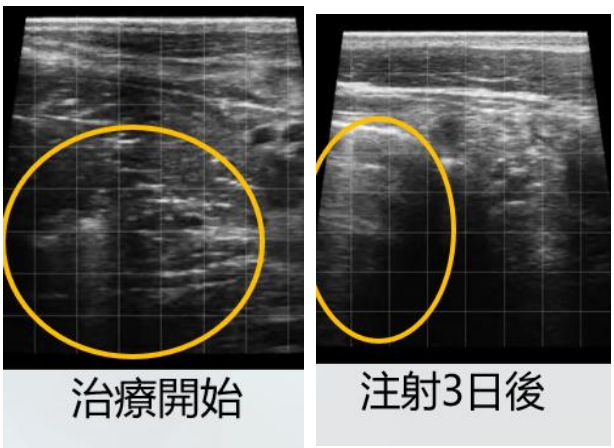
かなり大雑把な計算ですが、可能性としては十分にあり得ます。

肺炎、恐ろしいですね、、、、、

Total Herd Management Service

肺炎の治療は３日でいいのか？

皆さんご存じのとおり、多くの抗生剤が３日１セットで使用されます。しかし、肺炎は前述したとおりとても根が深い病気です。



これは肺のエコー画像です。丸で囲ったエリアは炎症が起こっている場所です。本来肺は空気を含むため、エコーでは黒く抜けて映りませんが炎症があると写真のように白く模様のように炎症が映ります。写真右の通り、注射３日後ではかなり綺麗になってきていますが、まだ少し炎症があります。ちなみにこの牛は注射開始の翌日から呼吸も落ち着き熱も下がり哺乳欲も戻っていました。

これが肺炎の厄介さです！どんなに軽傷でも、到底３日では治りません、、、

獣医によりますが、僕はどれだけ牛が元気で呼吸や肺音が落ち着いても最低１週間は治療を継続するようにしています。

＊抗生剤の長期連投を勧める記事ではありません！牛によっては単純に抗生剤が効いていないケースもあるため、2～3 日程度同じ抗生剤を使用し、改善傾向があるなら継続、ないなら獣医に診療依頼というような流れをお勧めします。

しかし、毎日注射をするのは大変、、、肺炎は一過性に猛威を振るうことも多々ありますので、規模によっては１日数十頭まとめて打つことになるケースもあります。

ロングアクティブ抗生剤を上手に使う

「そんな面倒なことはしていられない！」という方にお勧めなのがロングアクティブ（1 回の注射で長く効く）肺炎用抗生剤です！

ロングアクティブ系の抗生剤は 3～14 日程度の比較的長期間効果を持つものが多く、注射の手間を軽減してくれます。

ドラクシン	40 kg／1ml
ザクトラン	20kg/1ml
フロルガン	10kg/1ml

上記３つがよく使用される抗生剤です。右の欄が投与量になります。それぞれに特徴はありますが、１度の注射で長く効いてくれるため、何度も打つ必要がありません。

しかし、前述したとおり肺炎は根深くしつこく厄介な病気です。また、原因によっては打った注射が効いていないこともあります。１度打って放置していたら、ぶり返してそのまま廃用に、、、なんてことも珍しくありません！そこで、僕は下記のやり方をよく農家さんにお願いしています。

① 食欲があるが咳をする場合、上記 3 つのうちのどれかを打って 3 日様子見。ミルクを全く飲まない場合は即獣医に診療依頼

② 3 日後、その牛が **100 点満点**の状態に戻っていれば治療終了
少しでも気になる（活力、咳の有無、呼吸）場合は 1 度獣医に見せる

です！このやり方であれば、抗生剤が効かなかった場合のぶり返しを防ぐことができます。100 点満点というばっちりな状態になっているかどうかがポイントです！

＊長くなってしまうので割愛していますが、**決して抗生剤の積極使用を勧めるものではありません！！**どんな抗生剤も乱用すれば必ず耐性菌を生み、巡り巡って農場の生産性を落とす可能性があります。肺炎対策の基本は、環境・栄養・ワクチネーションです。

それでも対処しきれない場合に肺炎になってしまった場合の対処法の１例を今回紹介しています。

最後に、薬品のお知らせ

長らく生産が止まっていたフロルガンが生産再開されました！乱用は禁物ですが、フロロコールやニューフロールと同一成分の抗生剤で長く効く、肺炎治療の心強い味方です！肺炎が増えてきたら担当獣医師に相談の上、使用を検討してみてはいかがでしょうか？

Total Herd Management Service